

## 2. 奄美・沖縄地域における種子島の文化的影響 － 3～7世紀の土器を中心に－

具志堅清大  
沖縄県立埋蔵文化財センター

GUSHIKEN Seita  
Okinawa Prefectural Archeological Center

### 1. はじめに

貝塚時代後期前半（弥生時代並行期～古墳時代並行期）の沖縄諸島には、九州弥生地域との「南海産貝交易（木下1989）」によって九州本土や奄美群島から多数の搬入土器がもたらされている。九州弥生土器は弥生時代中期頃に搬入量のピークを迎え、後期以降は減少傾向となる。奄美産土器は弥生時代後期から古墳時代並行期は増加傾向となり、交易集団の主流が九州の集団から奄美の集団に置き換わる状況がこれまでの研究により指摘されている（新里2000b・2009・2015、安座間2000、中園2000、中村2013など）。

弥生時代終末期以降、種子島広田遺跡では貝製装身具が発達し、貝製品の素材貝類の選択と、南西諸島における広田遺跡に関連する貝製品の広がりからは、広田遺跡の上層タイプ貝符の時期に沖縄諸島と広田遺跡の関わりが密接になったと指摘されているが（木下2003）、これまでに沖縄諸島における大隅諸島産土器の明確な出土事例がほとんど知られていないため、当該時期の南西諸島の並行関係や交流様相が捉えにくい要因となっている。

以前に筆者らは、伊江島具志原貝塚出土の甕形土器脚部資料について、大隅諸島産の可能性あることを報告している（具志堅・石堂2017）。また、近年鹿児島大隅半島及び奄美地域において上能野式土器類似資料が確認されており注目される（川口2019）。

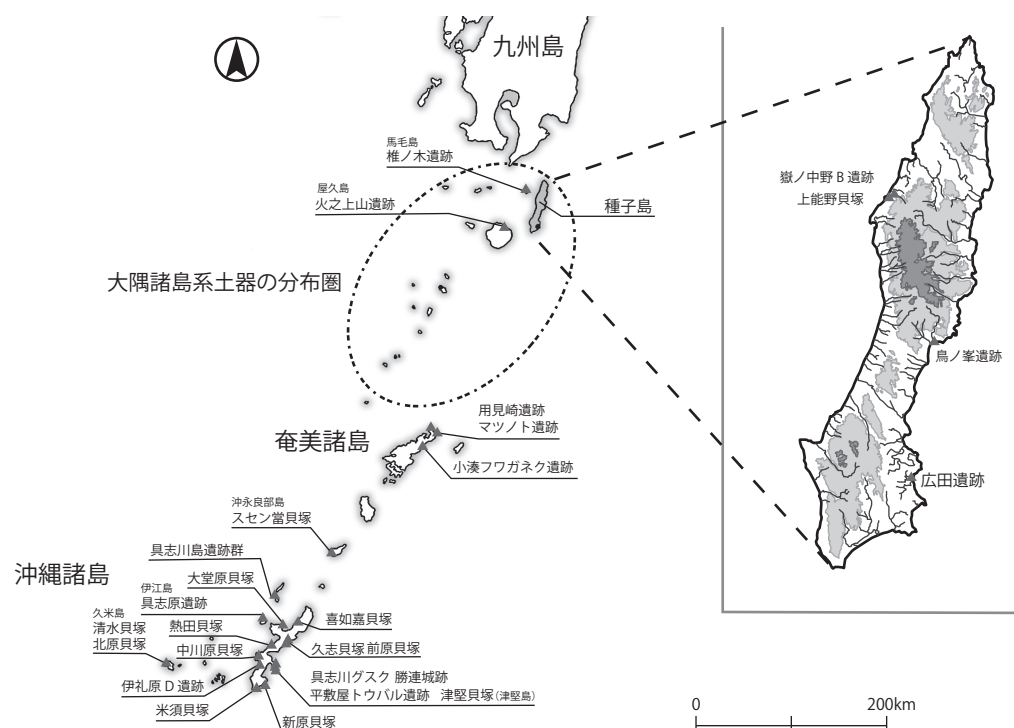


図1 本章で言及する遺跡の位置

本稿では、奄美・沖縄地域で出土する種子島広田遺跡関連土器資料（図1）を基に、当該時期の広田遺跡と奄美・沖縄地域との交流様相について整理し問題提起したい。

## 2. 3～7世紀の大隅諸島と奄美・沖縄の土器様相について

大隅諸島の在地土器は、縄文時代から弥生時代並行期は南九州の土器文化圏とほぼ同一で、土器型式も強い影響を受けている。

表1 南九州～沖縄諸島の土器並行関係（新里貴之2009）

時代	南九州	大隅	奄美	沖縄	貝塚時代
縄文	晩期	入佐式 黒川式	宇宿上層式	宇佐浜式	前V期
	早期	刻目突帯文	I	仲原式	
弥生	前期	高橋Ⅰ・Ⅱ式 ⇒?	II	阿波連浦下層式	後期前半
	中期	入来Ⅰ式 入来Ⅱ式 山ノ口式	3 サウチ 4 イヤンヤ洞穴 5 長浜金久第Ⅳ	↓? Ⅲ 浜屋原式	
	後期	松木菌式 高付式 鳥ノ峯式(古) 鳥ノ峯式(新)	6 宇宿港	Ⅳ 大当原式	
	終末期	中津野式	7 泉川		
	前期	東原式	8 スセン當式		
	中期	辻堂原式			
古墳	後期	笹貫式	9 兼久式	V アカジャンガー式 VI フェンサ下層式	後期後半
	古代	土師器			

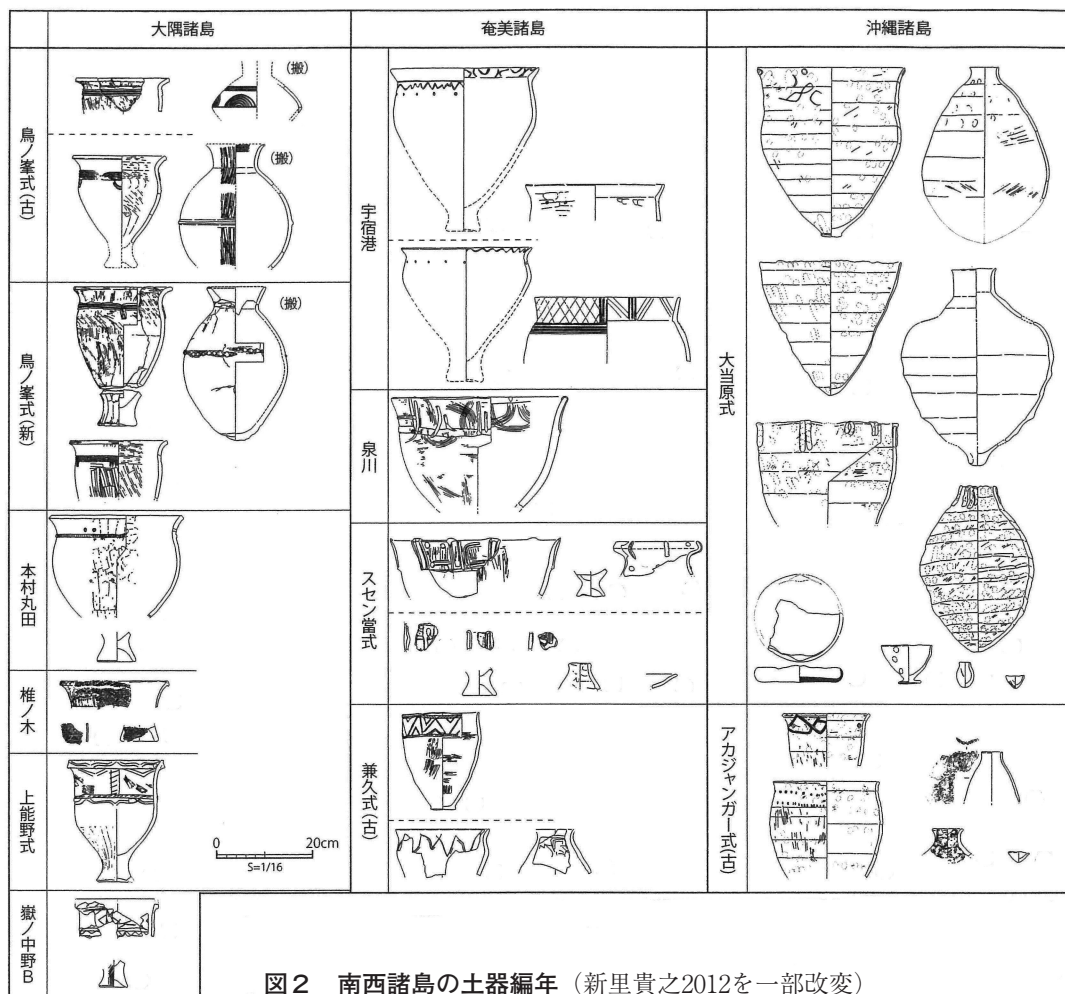


図2 南西諸島の土器編年（新里貴之2012を一部改変）

階、上層期は上能野式段階にそれぞれ位置付けられている（石堂2015・2019・本書石堂論文）。

これらに並行する奄美群島の土器としてスセン當式・兼久式土器、沖縄諸島においては大当原式・アカジャンガー式が挙げられる。当該時期の南西諸島は、九州産土師器・須恵器が殆ど見られないことから、各島嶼における在地土器の型式学的な先後関係を基に位置づけがなされ、明確な並行関係は把握できていない状況である（新里1999・2009・2012・2015、表1・図2）<sup>(1)</sup>。

### 3. 奄美・沖縄地域で出土する種子島広田遺跡関連土器資料について

#### 3.1. 沖縄諸島出土の大隅諸島系土器類似資料

大隅諸島系土器が沖縄諸島にどの程度搬入されているのかを把握するため、並行関係にある沖縄貝塚時代後期遺跡出土資料の確認を行ったところ、僅かに大隅諸島産の可能性のある資料を確認したため紹介する（図3-1～4）。

1は中川原貝塚出土資料で、弥生中期中葉（入来Ⅱ式～山ノ口Ⅰ式段階）の模倣土器として、胎土・色調が大隅諸島のと報告されている資料である。甕形土器の口縁部で、赤褐色の砂質で多量の雲母を含む胎土の特徴は、大隅諸島の胎土によく似ている印象を受けるものである。

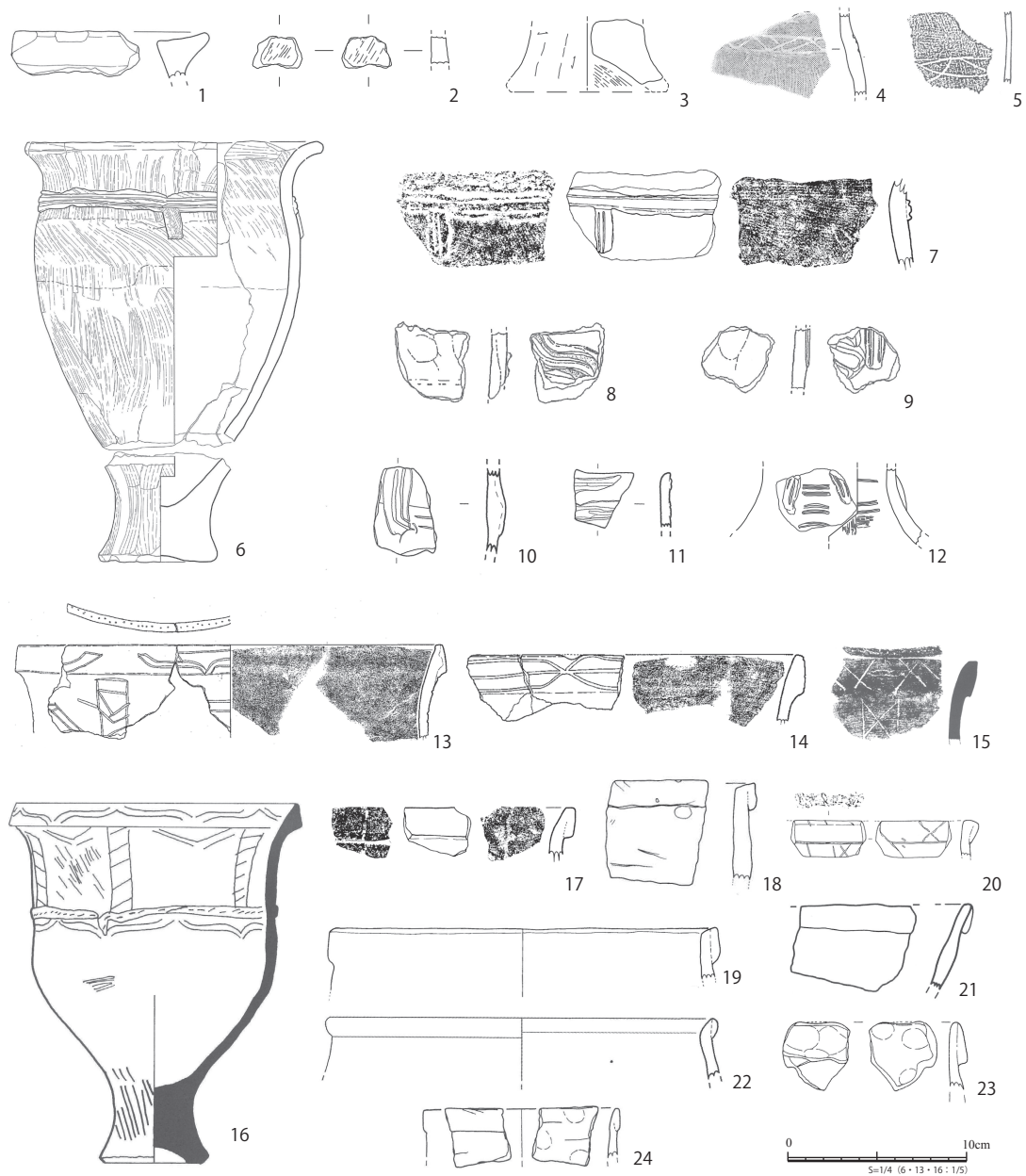
図3-2・3は具志原貝塚出土資料で、弥生時代後期後半～古墳時代並行期に位置付けられる大隅諸島の甕形土器に胎土や形態が類似する。同図2の胴部は内外面に粗い刷毛目状の調整痕が認められる。内面は煤により黒色を呈している。同図3の脚部は、以前に大隅諸島産の可能性のあるものとして紹介した資料である（具志堅・石堂2017）。外面は刷毛目状調整後に、入念にナデ消しを行っている。脚部内面は、指おさえと粗い刷毛目状調整が認められる。同図2・3は胎土の特徴から同一個体とみられる。黄橙色で多量の雲母を含む胎土の特徴から、搬入土器と考えられる。

図3-4は、北原貝塚出土の甕形とみられる胴部片で、上能野式に類似する資料である。外面の並行沈線内に弧状・V字状の沈線の一部重複させながら単位事に施すもので、大隅諸島の在地土器文様「相交弧文（新里1999）」に類似する。類例は馬毛島椎ノ木遺跡出土資料（図3-5）にみられる（熊本大学文学部考古学研究室1980）。外面下部には、刷毛目状の調整痕が見られる。内面は指おさえによる指頭痕が残る。多量の雲母を含む胎土の特徴から搬入土器と考えられる。このような文様は奄美・沖縄の在地土器にみられないもので、兼久式・アカジャンガー式では基本的に鋸歯状あるいは波状の文様を横位で連続的あるいは一筆書き的に施文することが多い。当該資料と椎ノ木遺跡出土資料はどちらも破片資料で文様モチーフ全体を窺えるものではないが、単位毎に施すか、連続的に施すかという文様意匠の観点からも、奄美・沖縄在地土器の文様と区別出来るものといえ、大隅諸島産の可能性を指摘できる。

##### 3.1.1. 大隅諸島系土器類似資料の位置づけ

中川原貝塚出土資料（図3-1）は大隅諸島土器胎土への類縁性を感じるものの、南九州の土器様式に含まれることと大隅諸島・南九州大隅半島産ともに胎土に雲母が混入される特徴があるため、区別することは非常に難しい。具志原貝塚出土資料（同図2・3）も胎土の雰囲気が大隅諸島産のものに類似するものの、口縁部形態や文様属性といった型式学的観点からの判断は困難である。そのため、今回の研究では具志原貝塚出土資料（同図2・3）の中性子放射化分析による産地同定を行ったが、沖縄在地土器とは異なることは明らかであるものの、大隅諸島産かどうかまでは断定することは出来なかった（本書第I部第2章）。

北原貝塚出土資料（図3-4）は、文様および胎土の特徴から大隅諸島産の可能性を指摘できるもので、当該資料は、遺構内一括資料として尖底・くびれ平底土器と共伴しているとされるが、調査報



1：中川原貝塚、2・3・23：具志原貝塚、4・20：北原貝塚、5：馬毛島椎ノ木遺跡、6：広田遺跡、7・17：火之上山遺跡、8・9：スセン當貝塚、10・11・22：前原貝塚、12・21：平敷屋トウバル遺跡、13・14：嶽ノ中野B遺跡、15：西之表市国上、16：上能野貝塚、18・19マツノト遺跡、24：勝連城跡

図3 南島における広田遺跡関連土器資料



告書が刊行されていないことから出土状況の詳細については不明であるものの、概ね大当原式～アカジャンガー式の過渡期段階に位置づけられる。また椎ノ木遺跡出土資料は、上能野式の前段階に位置づけられている（石堂2015・2019・本書石堂論文）。このことは、大当原式～アカジャンガー式の尖底・くびれ平底土器過渡期段階と上能野式の前段階が並行関係にあると捉えることができるが、上能野式は不明瞭な点が多く編年の位置付けも定まっていないことと、類例が乏しい状況ではあるため断言はできない。しかし、今後大隅諸島と沖縄諸島の並行関係を探る上では重要な検討資料の一つとなり得よう。

### 3.2. 土器制作技法から見る大隅諸島と奄美・沖縄諸島の技術交流について

奄美地域においては、すでに川口雅之によりマツノト遺跡出土資料に上能野式の影響を受けたとされる資料が見出されている（川口2019）。沖縄諸島においても大隅諸島産在地土器の影響を受けたと考えられる沖縄在地土器が僅かに認められたため紹介する（図3-6～24）。

#### 3.2.1. 鳥ノ峯式・広田式関連資料

大隅諸島の弥生後期後半～古墳時代前半期に位置付けられている鳥ノ峯式・広田式（石堂2015・2019）には、みかけ多条突帯（中園1988）と呼称される幅広粘土帯に沈線文を施すことによって多条突帯にみえるような効果をあげる特徴的な文様がみられる（図3-6・7）。みかけ多条突帯に類似する資料が沖永良部島スセン當貝塚出土土器資料にみられることが新里貴之により指摘されている（新里2000a）。

図3-8・9はスセン當貝塚出土の胴部片で、8はS字状幅広粘土帯の中央を窪ませることにより二条併走効果を得ている。同図9は縦位幅広粘土帯に沈線を施し多条突帯に見せかけている。鳥ノ峯式や広田式と文様パターンは異なるものの、施文技法が類似しており島嶼間で情報共有・交流があったことが窺える資料である。新里貴之は、当該時期における大隅諸島地域～奄美地域の関係性が土器に表象した事例としている（新里2000a）。いずれも新里貴之によるスセン當式土器編年Ⅱb段階、つまりスセン當式新段階に位置付けられる。

沖縄諸島においては前原貝塚（図3-10・11）や平敷屋トウバル遺跡（同図12）に類例が認められた。同図10は胴部に縦位幅広突帯を貼り付け、その上に沈線を施し多条突帯に見せかけるもので同図9に類縁性を感じる資料である。同図11は口縁部に横位の幅広突帯を貼り付け、その上に沈線を施すものでみかけ多条突帯に類似する。同図12は壺型胴部片で突帯上に沈線が施されている。これらは、いずれも胎土は沖縄在地的なものでスセン當式の模倣あるいは影響を受けたものと考えられる。奄美群島の在地土器において、みかけ多条突帯は非在地的な属性といえることから、大隅諸島在地土器の属性要素が、奄美群島を経由し、間接的に沖縄諸島在地土器の属性要素に取り込まれたものと捉えることができる。

#### 3.2.2. 上能野式関連資料

上能野式は大隅諸島の甕形在地土器で、古墳時代に位置付けられているものの年代的位置付けおよび存続年代については明確ではない（石堂2015・2019）。川口雅之は南九州および奄美における上能野式類似資料として外面口縁部に粘土帯を貼り付け、口縁部を肥厚させる資料を見出し、このような制作技法を南九州在地土器および奄美の兼久式にはみられないものとし、上能野式あるいはその影響を受けた資料と述べている（川口2019）。

川口によると、マツノト遺跡出土資料（図3-18・19）は、口縁部外面に粘土帯を貼り付けることにより断面方形状に肥厚させている。胎土は在地的であることから、兼久式に上能野式の製作技法を

取り入れて制作された土器と指摘されている。

沖縄諸島における類例として、北原貝塚出土資料（図3-20）がある。甕形土器の口縁部片で上能野式の文様モチーフに類似する資料である。口縁部外面に粘土帯を貼り付け方形に肥厚させ、外面肥厚部下に横位沈線、その下に縦位の平行沈線文+「X」字状文様を施す。内面も横位沈線と「X」字状文様を施す。口唇部には刻目が施される。口縁肥厚部外面にも斜沈線のような痕跡がみられるが判然としない。胎土は、灰色の泥質で沖縄在地土器である。

上能野式は口縁部外面に粘土帯を貼付けし、断面三角形状・あるいは方形に肥厚させることが特徴であるが、当該資料の肥厚口縁部のつくりは沖縄在地的で上能野式のものは異なる。一方で小片のため判然としないものの、上能野式の文様モチーフ（図3-13～16）に類似する（河口1973、旭1975）。上能野式の文様モチーフを模倣、あるいは影響を受けた沖縄在地土器と考えられる。

このほか、大当原式～アカジャンガー式出土遺跡において、まれに口縁部外面に幅広の粘土帯を貼り付け、断面三角形状あるいは方形に肥厚させるものがあり、類例として具志原貝塚、前原貝塚、平敷屋トウバル遺跡、勝連城跡（四の曲輪北区）などがあげられる（図3-21～24）。具志原貝塚では粘土帯を内面に貼り付け肥厚させているものもみられる。

大当原式は、造りが粗造で粘土帯接合痕が明瞭な土器から、厚さが均一でナデは比較的徹底した土器への型式変化が示されており（宮城2009）、基本的に舌状口縁で、無文主体の土器であるが、新段階には有文資料が増加する傾向が指摘されている。後続するアカジャンガー式との過渡期段階、すなわち尖底・平底両土器群の中間的な土器（宮城・安座間2013）の時期には大当原式・アカジャンガー式両型式の特徴を持つもので、口唇部を平坦にして刻目を施すものが多くみられるようになる。口唇部が平坦に意識して整形されることによって断面方形・口縁部端部が内面・外面にはみ出すものや、口縁部に粘土帯を継ぎ足し・貼り付けることによって肥厚させるものもみられる。これらは、典型的なアカジャンガー式とされる資料においても認められるもので尖底・平底土器の過渡的段階からアカジャンガー式に認められる。このように、口縁部に粘土帯を継ぎ足し・貼り付けにより肥厚させる例は、当該時期の沖縄在地的な土器制作技法に一般的にみられるものである。

今回取り上げた資料図3-21～24は、在地土器の中でも「粘土帯貼付により肥厚させる」という意匠がとりわけ強く感じるものである。沖縄在地的な土器制作技法の変化・変遷の中で生じたものとも考えられることから、上能野式の直接的な影響があったということまでは現時点では言及できないが、このように、口縁部外面に粘土帯を貼付し肥厚させるという土器制作技法は、ほぼ同時期の大隅諸島から奄美・沖縄地域に認められる。

#### 4. 貝符に類似する土器文様について

広田遺跡を代表する遺物の一つとして貝符が挙げられるが、貝符に類似する土器文様（以下、貝符類似文様）が奄美・沖縄地域の在地土器にみられることが先学により指摘されている。貝符類似文様をもとに、貝符が在地土器に与える影響について検討したい。

##### 4.1. 先行研究

貝符は琉球列島において、種子島広田遺跡を中心に奄美群島や沖縄諸島まで出土しているが、広田上層タイプの貝符は、広田下層タイプの貝符と比較すると広い範囲で出土しており出土量も多い。先学の研究による貝符文様の分類・編年案（木下1987・矢持2003・山野2019）によると、広田上層タイプの貝符は、基本的には眼をイメージさせる文様を軸として複雑なものから単純なものへと簡素化する型式変化の方向性が示されている。

広田上層タイプの貝符は、奄美群島においてはマツノト遺跡や用見崎遺跡の調査により兼久式土器と共伴することで知られており、中山清美は広田上層タイプ貝符が兼久式の古いタイプに共伴すること、沈線文土器と貝符文様が類似することを指摘している（中山1992a・b）。高梨修は兼久式土器の編年的考察の中で、貝符と兼久式土器の共伴事例について触れており、フワガネク遺跡第二次調査出土土器→フワガネク遺跡第一次調査・用見崎遺跡出土土器の型式学的変化に伴い、共伴する上層タイプの貝符文様も単純化することを指摘している（高梨2005a・b）。

中村直子は、広田上層タイプ貝符に類似する文様が兼久式土器に見られることに着目し、貝符と土器文様の比較検討を行っている。中村は、広田遺跡の上層タイプ貝符をA～I類と再分類し、型式学的変化と層位学的新旧関係からⅠ～Ⅲ期に分けた。貝符類似文様は、貝符と全く同一の文様はないものの、60度もしくは120度前後の屈曲部を持つ直線文を多用する点で、G類とした貝符と共通するとし、Ⅰ期の新段階からⅡ期に増加するとしている。

また、貝符の主文様であるA類文様（双眼をイメージさせる文様）は土器文様にみられず貝符にしか施されていない一方で、G類文様が地理的拡大とともに貝符以外の素材である土器に施されている点、種子島の土器には貝符類似文様が見られないことを挙げ、地理的・質的に周辺部で起こっている現象であることを指摘している（図4）。さらに、土器に貝符類似文が施されるプロセスについて、①オリジナルの文様が存在し、それが貝符や土器に施される場合、②貝符文様そのものが土器に転写される場合、の二通りを想定している（中村2004）。

沖縄諸島における共伴関係については、沖縄後期土器編年の研究が進められていく中で、貝符上層タイプが清水貝塚などの尖底主体遺跡や熱田貝塚など平底主体遺跡の両方で出土することから、尖底から平底への過渡期の遺跡で共伴することで認識され（岸本ほか2000）、その後、広田上層タイプ貝符の集成を行った山野ケン陽次郎は、上層タイプ貝符は尖底土器よりもアカジャンガー式・フェンサ下層式といったくびれ平底土器に主体的に共伴すると指摘している（山野2010）。

安座間充は、アカジャンガー式土器の編年的考察の中で、沖縄諸島における兼久式類似土器および貝符類似文様資料を見出している。沈線による幾何学的・直線的文様が施された資料について、アカジャンガー式土器有文資料全体では割合的に多くないと述べ、貝符類似文様が沖縄在地土器にみられることを指摘している（安座間2017・2019）。

これまでの研究によって、広田上層タイプ貝符は、奄美群島では兼久式、沖縄諸島においては大当原式～アカジャンガー式出土遺跡に共伴することで知られる。そして、共伴する在地土器には貝符類似文様がみられるということが指摘されている。

#### 4.2. 貝符類似文様の定義

続いて、貝符類似文様の定義について整理したい。中村直子は、貝符類似文様の共通点を下記のよう提示している（中村2004）。

- a：直線的な文様。
- b：60度もしくは120度前後の角を持つモチーフ。
- c：縦方向に伸びる文様。
- d：二重平行沈線文。

上記のうち、cの特徴についてはスセン當式の文様構成から奄美の土器文様の系譜にある可能性を示唆しつつも、このa～dの特徴は前段階の土器文様からは系譜の引けないものとしている。また、土器文様を抽出する上で注意しなければならないことは、①貝符に類似していること、②前段階の土器文様から系譜の引けない文様である、この2点が貝符類似の土器文様の前提条件として挙げられ



る。特に後者②の条件が重要であり、つまり貝符文様に類似するものの、土器の型式変化の流れで系譜の引ける場合、必ずしも貝符から影響を受けたとはいえないということである。

#### 4.3. 奄美・沖縄地域における貝符類似文様出土事例

中村による研究を踏まえ、貝符類似文様の類例収集を行ったところ、基本的にはシャープな沈線が多いが<sup>(2)</sup>、幅広沈線によるものもあり、文様は定型化せず、かなりバリエーションに富むことを確認した。また、沈線文のみを主体的文様として施文するものや突帯と沈線を組み合わせるものなど文様構成のパターンが認められた。比較対象とした広田上層タイプ貝符の分類名称は山野分類（山野2016・2019）を用いる（図5）。兼久式の貝符類似文様とともに紹介する（図6～7）。

**沈線文主体の土器** 沈線による貝符類似文様を施すもの。口縁部外面に描画的あるいは区画的な文様を沈線文主体により施すグループ。

図6-1は有文の大当原式で、外面口縁部に棒状工具で沈線による縦位・横位区画文を施し、区画内に「S」字状文様を施す。同貝塚より出土した広田下層タイプの貝符（同図2）の文様モチーフそのものではないが、一部を模倣した様な印象を受けるもので興味深い資料である。この貝符は攪乱層からの出土のため当該土器との関係は不明であるが、清水貝塚などにおける下層タイプ貝符出土例から、仮に当該土器と共伴関係にあっても違和感はない。このような区画的文様は無文主体の大当原式に少ないながらも認められるもので<sup>(3)</sup>、在地的文様に貝符類似文様が付加されたものと考えたい。中村の定義する貝符類似文の概念とは外れるとともに、偶然の一致である可能性もあるが、貝符に類似する文様が土器に施されるという現象について検討する上では興味深い資料である。

図6-3・4はフワガネク遺跡第二次調査（調査区3・12）出土土器で、山野分類の扇面類・波頂類などの文様モチーフに類似する。

図6-5～9は細沈線あるいは幅広沈線により60度もしくは120度前後の角を持つ描画的文様を施すものである。5は山野分類の扇面類にみられる三角形・菱形文に類似する。同図6～9は山野分類波頂類に類縁性を感じる資料である。同図5・6・10は清水貝塚、7は新原貝塚、同図8～9は北原貝塚出土である。同図10はシャープな沈線文で、報告書において「目」状の構成をなすと指摘されている。文様構成は山野分類双眼・単眼類にも類似するが判然としない。清水貝塚や北原貝塚では他にもシャープな沈線文による資料が見受けられる。

図6-11～13も小片のため判然としないが、貝符文様に近いと感じたため取り上げた。同図11は新原貝塚出土資料で山野分類無角類に近い。同図12は平敷屋トウバル遺跡、同図13で勝連城四の曲輪北区出土資料で山野分類片翼類・波頂類のモチーフに類縁性を感じる。

図6-14は、マツノト遺跡出土資料で、沈線による区画的かつ幾何学的な文様を施すもので、同遺跡出土の上層タイプ貝符（同図15）の文様モチーフに類似するもので興味深い。また、今回は図示できなかったが、マツノト遺跡第2文化層出土土器には沈線文により山野分類波頂類の三角文にかなり類似する資料があり興味深い<sup>(4)</sup>。

**沈線文+突帯貼り付け文の土器** 沈線文と突帯貼り付けによる装飾を組み合わせたモチーフのものである。突帯貼り付けについては、近年安座間によりスセン當式・大当原式段階の突帯による装飾的な文様を、後続するくびれ平底土器段階の区画的突帯と区別し、突帯装飾文と提唱されている（安座間2019）。また、刻目突帯を屈曲させるものもあり、兼久式・アカジャンガー式土器によくみる横位の刻目突帯による区画文とは区別できる。

図6-16・17は熱田貝塚出土資料で山野分類波頂類に良く似た文様モチーフを突帯文と組み合わせて施している。



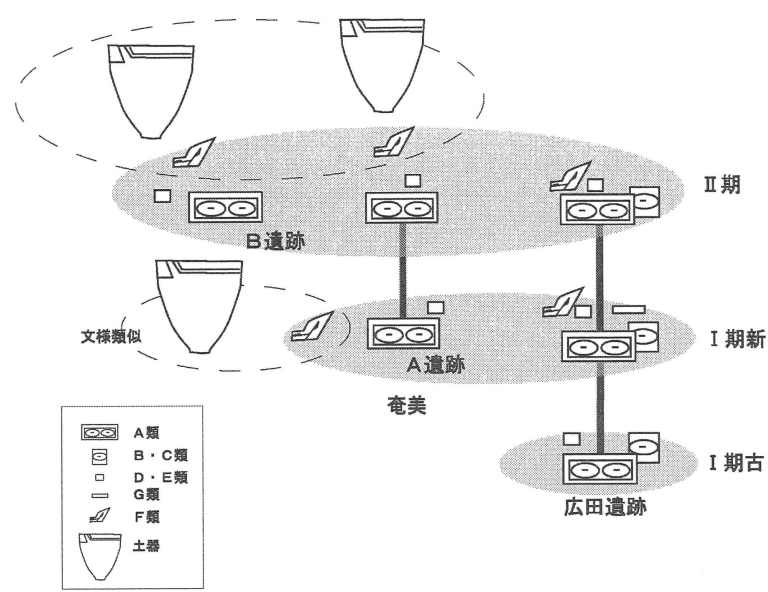


図4 上層タイプ貝符と土器文様の関係 (中村2004)

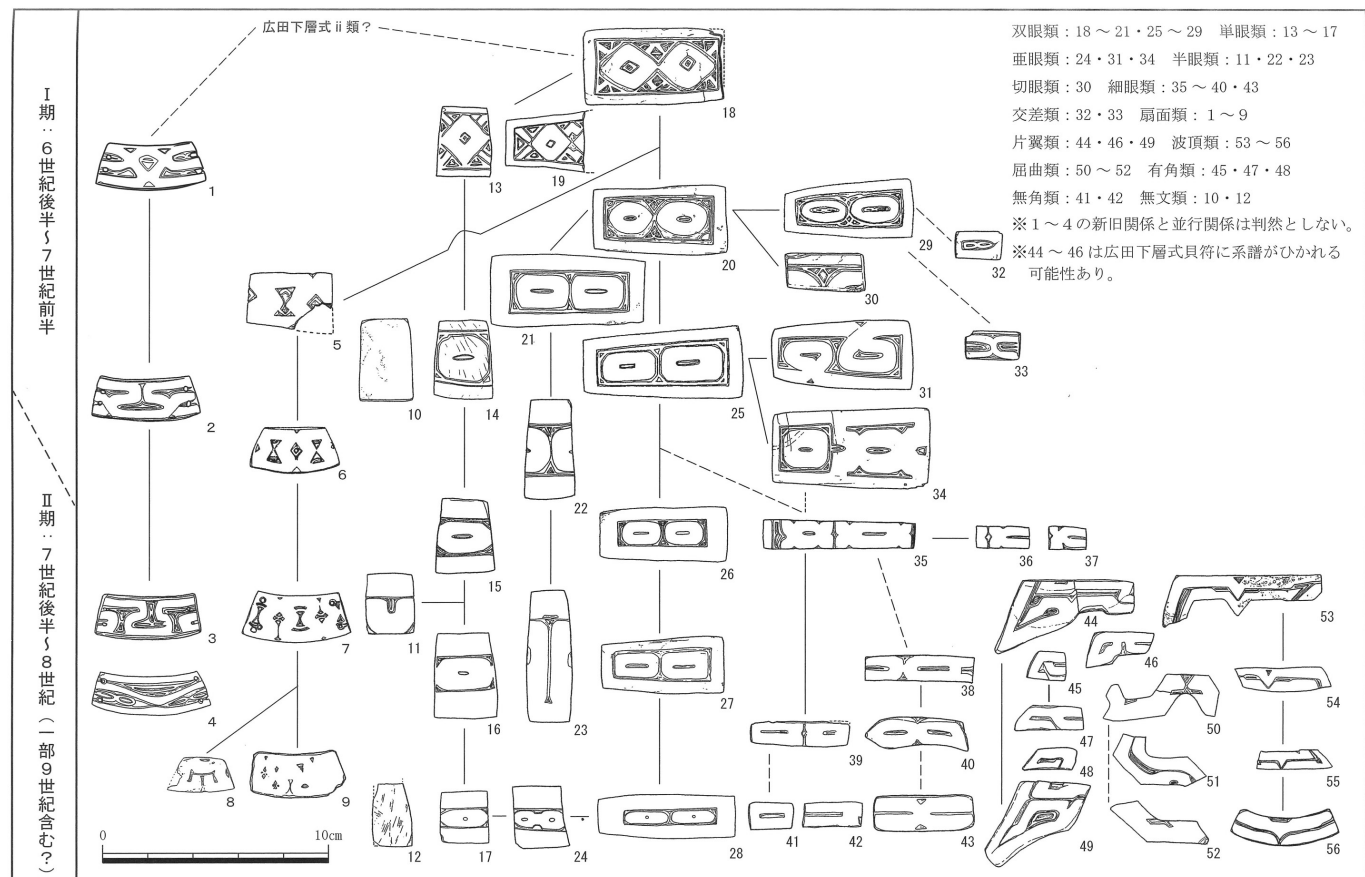


図5 上層タイプ貝符編年図 (山野2019)

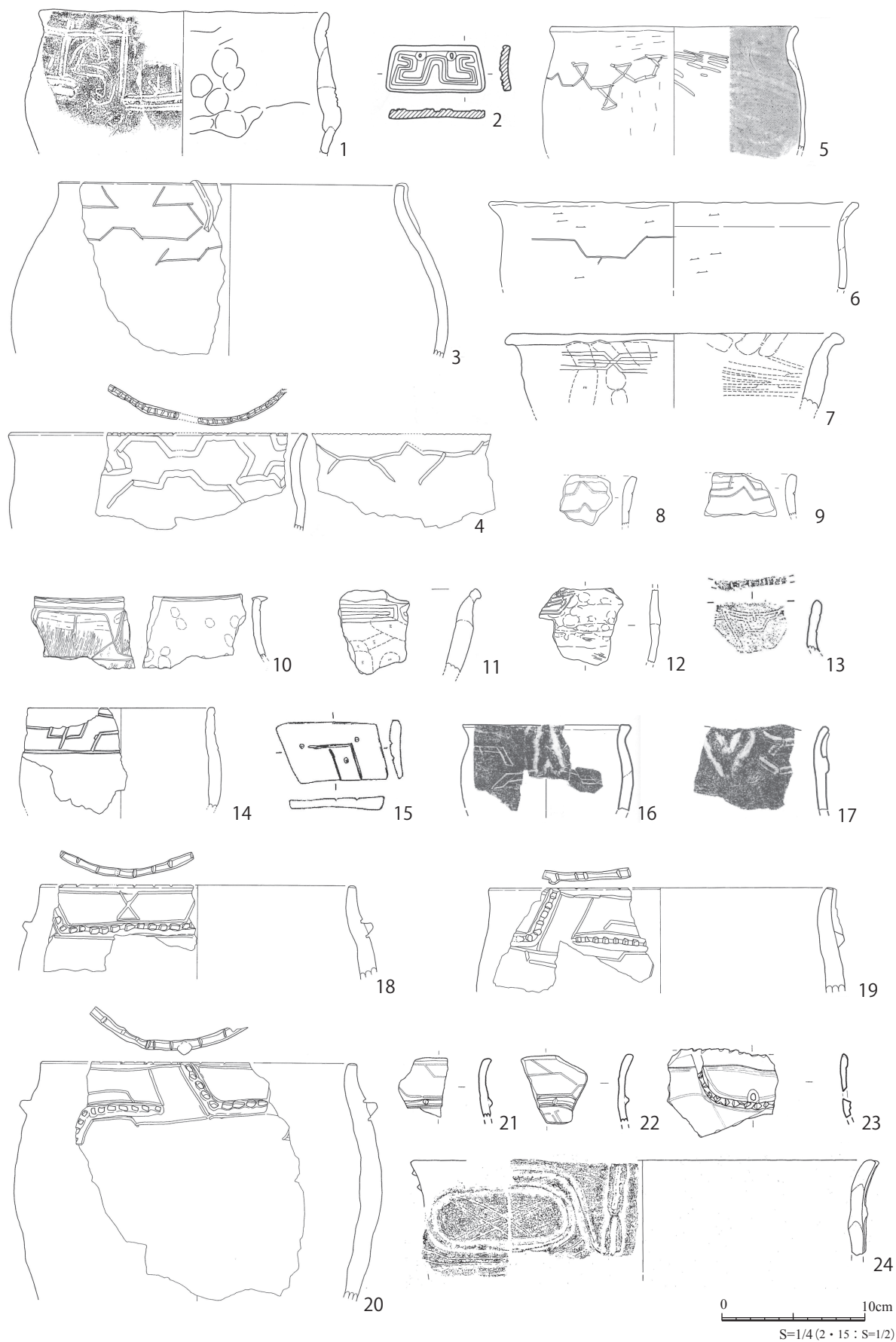
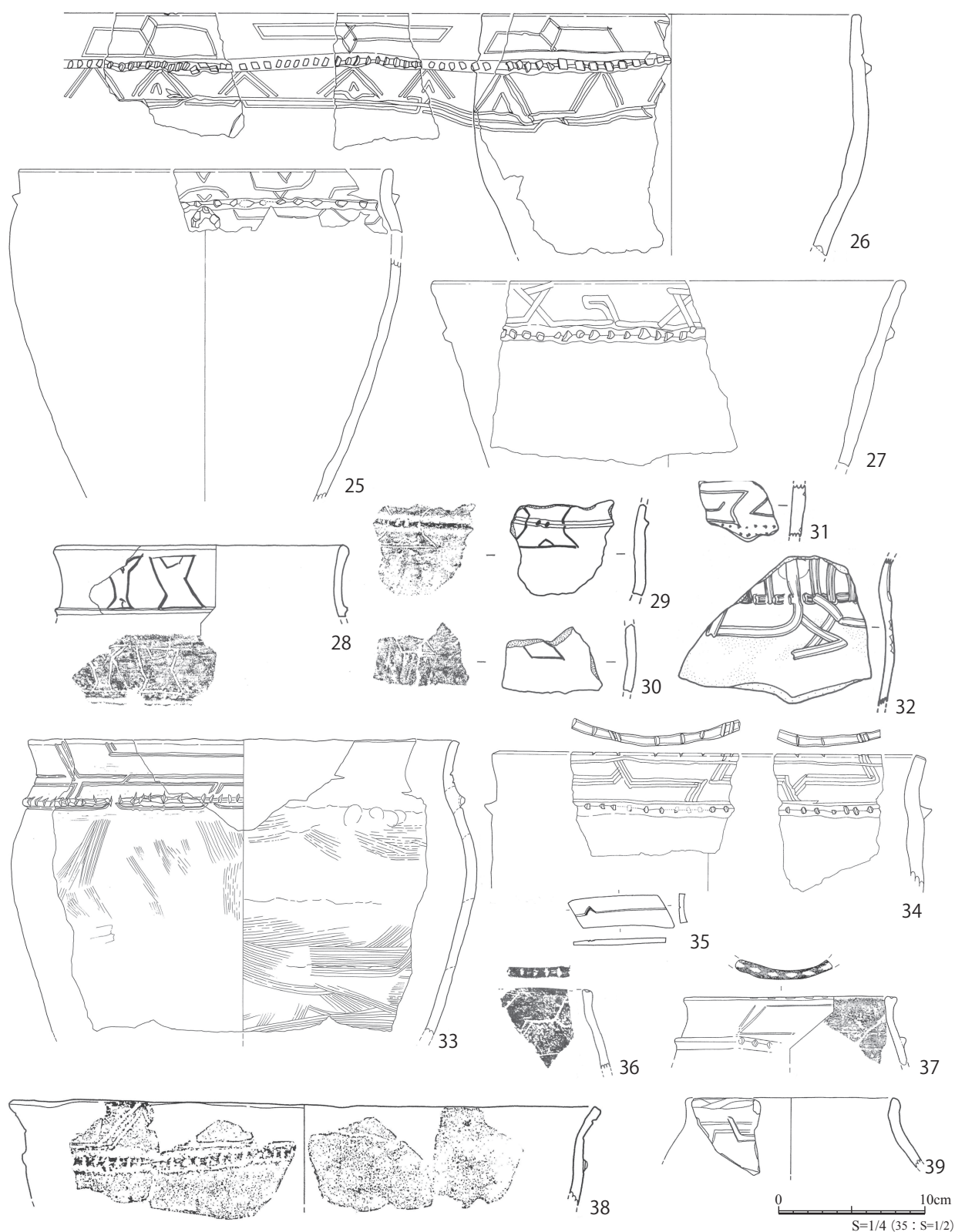


図6 南島の土器における貝符類似文様と貝符1



1・2・24：大堂原貝塚 3・4・18～20・25～27・34・35：フワガネク遺跡 5・6・10：清水貝塚 7・11：新原貝塚 8・9：北原貝塚  
 12：平敷屋トウバル遺跡 13：勝連城跡 14・15：マツノト遺跡 16・17：熱田貝塚 21～23：前原貝塚 28～30：具志川島遺跡群  
 31・32：久志貝塚 33：用見崎遺跡 36：米須貝塚 37：伊礼原D遺跡 38：喜如嘉貝塚 39：具志川グスク

図7 南島の土器における貝符類似文様と貝符2

図6-18~20はフワガネク遺跡第二次調査（調査区3・12）出土土器で、刻目突帯を屈曲させ沈線とともに区画的な文様を施している。18は区画内に菱形文を施すもので山野分類の扇面類、19・20は、山野分類類片翼類・有角類にそれぞれ文様モチーフに類縁性を見出せる。

図6-21・22は、前原貝塚出土資料で刻目突帯とシャープな沈線により区画的文様を施している。小片のため断言はできないが、同図19や20に近い文様モチーフとなる可能性が高い。23は貝符文様には類似しないものの、文様意匠が近似する。大堂原貝塚出土例（同図24）も、突帯装飾と沈線による区画的文様を施し、区画内はシャープな沈線により充填する資料で、貝符類似文様ではないが類縁性を感じる資料として取り上げた。

**沈線+横位区画文様の土器** 沈線と横位区画文の組み合わせによるもの。区画文は刻目突帯のほか刺突文、横捺刻文がみられる。

図7-25~27はフワガネク遺跡出土土器で、横位の刻目突帯の上下もしくは上のみに沈線による描画的かつ区画的文様を施すものである。同図25は第二次調査（調査区3・12）出土土器で刻目突帯の上下に山野分類扇面類に良く似た文様モチーフを施す。26・27は第一次調査（調査区11）出土資料である。同図26は山野分類波頂類の三角文を突帯の上下に配する。27は扇面類を簡略化したような文様である。

図7-28~30の具志川島遺跡群表採資料で、突帯文の上下に施される文様は、山野分類扇面類の文様構成を簡略化したような印象を受ける。同図31・32は久志貝塚出土資料で、31は刺突文による区画文と同図28・29に似た文様モチーフを施す。同図32の横捺刻文による区画文下部に幅広沈線で施される文様は、フワガネク遺跡例（同図27）に近似する。

図7-33・34はより簡略化・単純化が進んだ直線的な文様で、中村直子が指摘する60度もしくは120度前後の角を持つモチーフを施すもので山野分類波頂類に類似する。特に同図34のフワガネク遺跡第二次調査（調査区3・12）出土土器は山野分類波頂類（図5-55）に非常に類似するとともに、同調査でも波頂類とみられる上層タイプ貝符（同図35）が出土していることは興味深い。同図33は用見崎遺跡第二次調査出土資料である。これらに類似する沖縄在地土器資料として、喜如嘉貝塚（同図38）、伊礼原D遺跡（同図37）がある。米須貝塚（同図36）、具志川グスク（同図39）出土例は区画文を伴わないものの類例資料として取り上げた。

この他、土器資料ではないが、米須貝塚表採の貝符類似文様が施された土製品がある。山野分類双眼類・単眼類に類縁性を感じる。同貝塚では双眼類の上層タイプ貝符が採集されていることも興味深い（図8）。

## 5. 貝符類似文様の位置づけ

以上、奄美・沖縄地域における貝符類似文様について提示した。貝符類似文様は、奄美群島の兼久式ではフワガネク遺跡やマツノト遺跡な

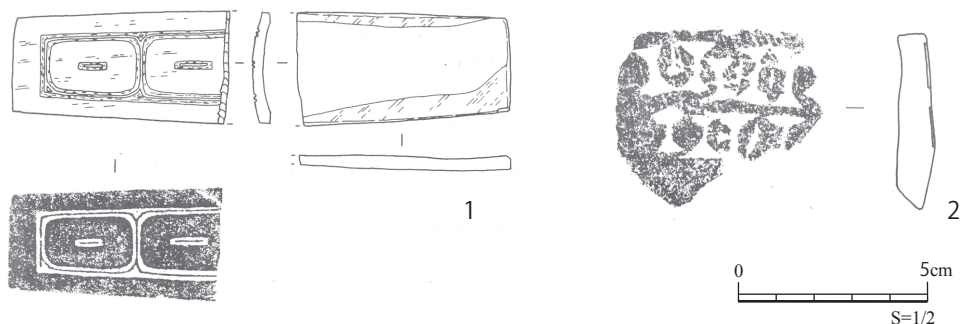


図8 米須貝塚出土の上層タイプ貝符と土製品



ど広田上層タイプ貝符出土遺跡を中心に認められることが中村により指摘されているが、沖縄諸島においても、大当原式～アカジャンガー式段階の広田上層タイプ貝符出土遺跡を中心に認められた。分布の傾向としては、沖縄よりも奄美地域に多い印象を受ける。

一方で、兼久式前段階に位置付けられるスセン當式には、貝符に類似する文様は管見の限りでは認められなかった。奄美地域における貝符類似文様の初現は、現段階では兼久式の古段階（高梨1999など）とされる沈線文のみで構成される土器群に求められる。なお、スセン當式から兼久式に到る型式学的な隔たりがこれまでに指摘されており（新里2000a・2013）、今後の資料増加・奄美地域の土器編年研究によってはスセン當式から兼久式への過渡期に求められる可能性も想定できる。

本稿では、貝符類似文様を文様構成から大きく三つに分類したが、貝符類似文様は在地土器文様の属性要素に組み合わされる場合が多いことから、文様構成も在地土器文様の変遷と連動しているようである。

沈線文主体的文様は、清水貝塚例から大当原式段階を初現とし、沈線文＋突帯貼付文様とともに後続するアカジャンガー式との過渡期段階～アカジャンガー式段階までみられる。沈線＋横位区画文はアカジャンガー式段階に主体的に認められる。これらは奄美の在地土器にも類似しており、特に沈線＋横位区画文としたグループは、貝符文様に類似するだけでなく兼久式にも類似する。

今回取り上げなかったが、兼久式では貝符文様を簡略化・簡素化したような文様モチーフが多数認められる。また、上能野式には貝符文様に直接的に類似しないものの前段階からの系譜が引けない文様もみられることも中村により指摘されており<sup>(5)</sup>、奄美・沖縄地域の在地土器にも貝符文様に直接的には類似しないものの、前段階からの系譜が引けない文様が認められた。

今回は文様構成のパターンから大まかな分類試案を提示したが、上述した貝符類似文様あるいは影響を受けたと考える文様モチーフを含めるとより細分可能である。奄美・沖縄にみられる貝符類似文様モチーフの類似性は、当該時期の奄美・沖縄の土器様相について考察する手がかりの一つとなり得よう。

## 6. 結語

奄美・沖縄地域における広田遺跡関連土器資料として、大隅諸島系土器類似資料あるいはその影響を受けた土器、貝符類似文様を取り上げ、奄美・沖縄地域の在地土器文化に与える影響について検討した。

結論として、大隅諸島系土器の他地域への搬出例が僅かであること、奄美・沖縄在地土器に大隅諸島の在地土器的要素が模倣され取り入れられる事例は認められるが僅かであることから、大隅諸島系土器が奄美・沖縄地域へ与えた影響はかなり低い。これまで奄美・沖縄地域において大隅諸島系土器の出土例が乏しいことから、大隅諸島の土器は島嶼内に留まるものとされ、具体的な並行関係や交流様相については検討することは困難な状況であった。しかし、今回見出すことができた大隅諸島系土器類似資料あるいはその影響を受けた土器の存在は、少なくとも島嶼間の直接的あるいは間接的な交流・情報共有があったことを示すものである。

一方で、貝符類似文様については、奄美・沖縄地域の在地土器に一定量認められ、特に兼久式に多い印象を受ける。貝符類似文様はそもそも貝符を模倣したのかという問題点も挙げられるが、貝符類似文様が奄美・沖縄の在地土器に取り入れられる事例がこのように認められるということは、貝符あるいは貝符に類似する文様モチーフが奄美・沖縄人にそれだけのインパクトを与え、影響力を持っていたのであろう。大隅諸島系土器類似資料あるいはその影響を受けた土器の分布と比較すると対照的

であることを指摘できる。

また、貝符類似文様は奄美の在地土器にも類似することを指摘したが、これまでに兼久式とアカジャンガー式は型式学的に類似することで知られ、兼久式・アカジャンガー式が成立する背景として、奄美・沖縄両地域の在地土器が相互に影響（技術的交流）を受けて型式学的に近くなったことによる可能性が指摘されている（安座間2016・2019・川口2019）。南島における上層タイプ貝符の広がり  
と貝符類似文様は、当該時期の島嶼間交流の様相を特に表しているように見える。広田遺跡における貝製品素材の需要により、大隅諸島と素材供給地である沖縄諸島の関係が強くなり、その中間に位置する奄美群島が仲介者として島嶼間の交流・情報伝達の役割を担ったことによって、相互の土器様相に影響をもたらした貝符類似文様が出現した可能性がある。このことは、奄美・沖縄両地域におけるくびれ平底土器様式の成立にも関係する可能性があるが、くびれ平底土器様式の前段階に位置づけられているスセン當式と大当原式の分析を踏まえた上での検討も必要であり、今後の課題としたい。

本稿執筆・資料調査においては、下記の方々・機関にご協力・ご助言いただいた。記して感謝申し上げます。

稲垣友裕、太田菜摘美、沖田純一郎、新里貴之、島袋春美、菅原広史、瑞慶覧長順、砂川暁洸、田里一寿、玉榮飛道、中島徹也、松原哲志、南勇輔、宮城弘樹、横尾昌樹、伊江村教育委員会、浦添市教育委員会、うるま市教育委員会、沖縄県立埋蔵文化財センター、久米島博物館、宜野座村立博物館、北谷町教育委員会、中種子町教育委員会、名護市教育委員会、西之表市教育委員会、広田遺跡ミュージアム、読谷村教育委員会

#### 注

- (1) 南西諸島の土器並行関係について、新里貴之2015論考において、表1（新里2009）の大隅諸島と奄美群島の間が空白となり離れていることは、両地域の交差年代を取ることができないことを示すとともに、図2（新里2012）の横線は並行関係を示しているものではないことを補足している。
- (2) 貝符類似文様のシャープな沈線文は、上層タイプ貝符の線刻に類似することから、同様な工具を用いた可能性も考えられる。
- (3) 伊礼原D遺跡（北谷町教委2013第35集）、伊礼原遺跡・伊礼原A遺跡（北谷町教委2014第36集）、平敷屋トウバル遺跡（沖縄県教委1996第125集：報告書第26図10）等。
- (4) 既に中山清美氏によって貝符類似文様が指摘されている資料で、当該土器群について検討する上では欠かせない資料であるが、報告書では未掲載となっている。中山清美1992b 30頁。
- (5) 中村直子は、広田上層タイプ貝符と同時期にある上能野式の文様に、貝符文様に直接的に類似すると説明できないが、シャープで前段階から系譜の引けない文様がみられることを指摘している。これは貝符文様が上能野式の土器文様に与えた影響について示唆するものとみられる。また、熱田貝塚出土資料（図6-16）や新原貝塚出土資料（図6-7）の文様モチーフは上能野式（図3-13・14）にも類似するようにもみえる。

#### 文献

- 旭慶男 1975「種子島における弥生式土器」『旭慶男君著作集』、pp.11-101、旭慶男君著作集刊行会
- 安座間 充 2000「琉球弧からみた弥生時代併行期の九州との交流様相－当該期搬入土器群および「弥生系土器」の再検証を中心に－」『地域文化論叢』第3号、pp.1-46、沖縄国際大学大学院地域文化研究科
- 安座間充 2014「貝塚時代後1期・沖縄諸島の土器動態」『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』琉球列島先

- 史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集第1集、pp.157-172、六一書房
- 安座 充 2016「貝塚時代後期・沖縄諸島の土器様式変化をめぐる理解」『廣友会誌 高宮廣衛先生追悼号』第9号、pp.44-53、廣友会
- 安座間充 2017「アカジャンガー式の編年的考察」『奄美・沖縄における貝塚時代後期土器の編年』平成29年度奄美考古学会沖縄大会資料集、pp.20-37、平成29年度奄美考古学会沖縄大会実行委員会
- 安座間充 2019「沖縄出土の兼久式土器・類似土器－付 アカジャンガー式土器出土遺跡集成－」『中山清美と奄美学－中山清美氏追悼論集－』、pp.111-121、奄美考古学会
- 奄美考古学会 2016『奄美考古』第8号兼久式土器特集号（資料編）
- 奄美市教育委員会 2007『小湊フワガネク遺跡群Ⅱ 学校法人日章学園「奄美看護福祉専門学校」拡張事業に伴う緊急発掘調査報告書』奄美市文化財調査報告書一
- 石堂和博 2014「大隅諸島の先史文化にみられる生業の特徴と変遷」『琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷』琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集第2集、pp.159-170、六一書房
- 石堂和博 2015「古墳時代後期並行期～奈良時代における九州本土と大隅諸島の交流～古墳時代後期並行期から奈良時代における大隅諸島の様相を中心に～」『平成27年度 第6回 奄美考古学会（種子島大会）研究発表資料』
- 石堂和博 2019「古墳時代後期並行期から8世紀における大隅諸島と九州本土及び奄美、沖縄諸島との交流」『中山清美と奄美学－中山清美氏追悼論集－』、pp.99-110、奄美考古学会
- 伊是名村教育委員会 1977『具志川島遺跡群 第一次発掘調査報告書』伊是名村文化財調査報告書 第1集
- 糸満市教育委員会 1985『米須貝塚－範囲確認調査報告書－』糸満市文化財調査報告書第5集
- うるま市教育委員会 2006『具志川グスクⅠ－発掘調査報告概報－』うるま市文化財調査報告書第4集
- うるま市教育委員会 2011『勝連城跡－四の曲輪北区発掘調査報告書－』うるま市文化財調査報告書第14集
- 沖縄県教育委員会 1979『恩納村熱田貝塚発掘調査報告書－国道58号線拡幅工事に伴う緊急発掘調査－』沖縄県文化財調査報告書 第23集
- 沖縄県教育委員会 1985『伊江島具志原貝塚の概要』沖縄県文化財調査報告書第61集
- 沖縄県教育委員会 1992『新空港・空港拡張建設計画予定地内の遺跡－新石垣空港・久米島空港拡張建設計画予定地内の分布調査報告書－』沖縄県文化財調査報告書第106集
- 沖縄県教育委員会 1994『喜如嘉貝塚－国道58号改修工事に係る緊急発掘調査報告－』沖縄県文化財調査報告書第114集
- 沖縄県教育委員会 1996『平敷屋トウバル遺跡－ホワイトビーチ地区内倉庫建設工事に伴う緊急発掘調査報告書－』沖縄県文化財調査報告書第125集
- 沖縄県教育委員会 1997『伊江島具志原貝塚発掘調査報告』沖縄県文化財調査報告書第130集
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1996『火ノ上山遺跡 宮之浦港改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（17）
- 笠利町教育委員会 2006『マツノト遺跡』笠利町文化財調査報告第28集
- 河口貞徳 1973「上能野貝塚発掘概報」『鹿児島考古』第7号、pp.59-68、鹿児島考古学会
- 川口雅之 2019「大隅諸島上能野式土器の年代及び兼久式土器成立の背景について」『中山清美と奄美学－中山清美氏追悼論集－』、pp.83-97、奄美考古学会
- 岸本義彦・西銘章・宮城弘樹・安座間充 2000「沖縄編年後期の土器様相について」『琉球・東アジアの人と文化』上巻、pp.131-152、高宮廣衛先生古希記念論集
- 宜野座村教育委員会 2005『前原貝塚－村道サー原線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』宜野座村

第Ⅱ部

乃文化財17集

- 木下尚子 1987「貝符」『弥生文化の研究』第8巻、pp.198-206、雄山閣
- 木下尚子 1989「南海産貝輪交易考」『生産と流通の考古学－横山浩一先生退官記念論文集－』、pp.203-249、横山浩一先生退官記念事業会
- 木下尚子 1996『南島貝文化の研究－貝の道の考古学－』法政大学出版
- 木下尚子 2003「貝製装身具からみた広田遺跡」『種子島 広田遺跡（本文編）』、pp.329-366、広田遺跡学術調査研究会・鹿児島県立歴史資料センター黎明館
- 木下尚子 2019「小湊フワガネク遺跡と広田遺跡－奄美大島の鉄器導入期の考察－」『中山清美と奄美学－中山清美氏追悼論集－』、pp.149-167、奄美考古学会
- 具志川村教育委員会 1989『清水貝塚 発掘調査報告書』具志川村文化財調査報告書第1集
- 具志堅清大・石堂和博 2017「伊江島具志原貝塚出土の甕形土器脚部資料について」『南島考古』第36号、pp.161-168、沖縄考古学会
- 熊本大学文学部考古学研究室 1980『馬毛島埋葬址－西之表市椎ノ木遺跡－』研究室活動報告6
- 熊本大学文学部考古学研究室 1995『用見崎遺跡』研究室活動報告31
- 桑原久男ほか 2003『種子島 広田遺跡』、広田遺跡学術調査研究会・鹿児島県立歴史資料センター黎明館
- 新里貴之 1999「南西諸島における弥生並行期の土器」『人類史研究』第11号、pp.75-106、人類史研究会
- 新里貴之 2000a「スセン當式土器」『琉球・東アジアの人と文化』上巻、pp.153-173、高宮廣衛先生古希記念論集
- 新里貴之 2000b「九州・南西諸島における弥生時代・並行期の土器移動について－基礎的作業－」『大河』第7号、pp.237-257、大河同人
- 新里貴之 2009「貝塚時代後期文化と弥生文化」『弥生時代の考古学 1 弥生文化の輪郭』、pp.148-164、同成社
- 新里貴之 2012「貝塚時代後期文化と古墳文化」『古墳時代の考古学 7 内外の交流と時代の潮流』、pp.146-158、同成社
- 新里貴之 2013「ナガラ原東貝塚出土のスセン當類似土器について」『ナガラ原東貝塚の研究 5世紀から7世紀前半の沖縄諸島』pp.248-258、熊本大学文学部
- 新里貴之 2015「南西諸島の土器と成川式土器」『成川式土器ってなんだ？－鹿大キャンパスの遺跡で出土する土器－』、pp.31-38、鹿児島大学総合研究博物館
- 高梨修 1999「いわゆる兼久式土器と小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土土器の比較検討」『第2回奄美博物館シンポジウム サンゴ礁の島嶼地域と古代国家の交流－ヤコウガイをめぐる考古学・歴史学－』、pp.19-40、名瀬市教育委員会
- 高梨修 2005a「小湊フワガネク遺跡群第一次調査・第二次調査出土土器の分類と編年」『小湊フワガネク遺跡群 I 学校法人日章学園「奄美看護福祉専門学校」拡張事業に伴う緊急発掘調査報告書』名瀬市文化財叢書七
- 高梨修 2005b『ヤコウガイの考古学』ものが語る歴史シリーズ⑩ 同成社
- 北谷町教育委員会 2013『伊礼原 D 遺跡－桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成18・19年度）－』北谷町文化財調査報告書第35集
- 北谷町教育委員会 2014『伊礼原遺跡（国指定外） 伊礼原 A 遺跡－桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成19・20・24年度）－』北谷町文化財調査報告書第36集
- 北谷町教育委員会 2017『伊礼原 D 遺跡 平安山原 A 遺跡－桑江伊平地区現状回復事業に伴う発掘調査事業（平成18年度）－』北谷町文化財調査報告書第41集
- 友寄英一郎・高宮廣衛 1968「伊江島具志原貝塚調査概報」『琉球大学法文学部紀要』社会篇第12号、pp.37-76、琉球大学法文学部



- 友寄英一郎 1970「沖縄出土の弥生土器」『琉球大学法文学部紀要社会篇』第14号、pp.47-55、琉球大学法文学部
- 仲宗根求・西銘章・宮城弘樹・安座間充 2001「読谷村出土の弥生土器・弥生系土器について」『読谷村歴史民俗資料館紀要』第25号、pp.59-79、読谷村歴史民俗資料館
- 中園聡 1988「土器様式の動態－古墳の南限付近を対象として－」『人類史研究』第7号、pp.31-69、人類史研究会
- 中園聡 2000「沖縄諸島出土の九州系弥生土器一様式の同定と解釈」『琉球・東アジアの人と文化』上巻 高宮廣衛先生古希記念論集、pp.111-130、高宮廣衛先生古希記念論集刊行会
- 中山清美 1992a「奄美における貝符と兼久式土器」『奄美学術調査記念論文集』、pp.165-173、南日本文化研究所叢書
- 中山清美 1992b「マツノト遺跡発掘調査概報」『奄美考古』第3号、pp.15-38、奄美考古学会
- 中村直子 2004「貝符に類似する土器文様の検討」『島嶼地域の諸相』東南アジア考古学会研究報告第2号、pp.19-30、東南アジア考古学会
- 中村直子 2013「ナガラ原東貝塚出土の成川式土器の位置づけ」『ナガラ原東貝塚の研究』、pp.259-268、熊本大学文学部
- 名護市教育委員会 1980『久志貝塚緊急発掘調査概報』名護市文化財調査報告書－2
- 名護市教育委員会 2005『大堂原貝塚－古宇利屋我地線建設に伴う緊急発掘調査報告書－』名護市文化財調査報告書第17集
- 名瀬市教育委員会 2005『小湊フワガネク遺跡群Ⅰ 学校法人日章学園「奄美看護福祉専門学校」拡張事業に伴う緊急発掘調査報告書』名瀬市文化財叢書七
- 南城市教育委員会 2011『市内遺跡発掘調査報告書－新原貝塚・知名グスク－』南城市文化財調査報告書第10集
- 西之表市教育委員会 1995『嶽ノ中野B遺跡 農免農道整備事業（能野地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査』西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書（8）
- 西之表市教育委員会 2019『内城址・上能野貝塚 西之表市埋蔵文化財発掘調査概報 市内遺跡発掘調査等事業に伴う発掘調査概報』
- 南種子町教育委員会 2007『広田遺跡』南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書（15）
- 宮城弘樹 2000「貝塚時代後期土器の研究（Ⅱ）－後期遺跡の集成－」『南島考古』第19号、pp.45-62、沖縄考古学会
- 宮城弘樹 2009「沖縄貝塚時代後期土器の研究（Ⅳ）－大当原式土器とその概念整理－」『廣友会会誌』第5号、pp.19-34 廣友会
- 宮城弘樹 2013「沖縄貝塚時代後期土器の研究（Ⅴ）－アカジャンガー式土器の概念整理－」『廣友会会誌』第6号、pp.11-20 廣友会
- 宮城弘樹・安座間充 2013「沖縄諸島土器編年におけるナガラ原東貝塚の土器」『ナガラ原東貝塚の研究 5世紀から7世紀前半の沖縄諸島』pp.231-247、熊本大学文学部
- 山野ケン陽次郎 2010「広田上層タイプ貝符に関する一考察」『南島考古』第29号、pp.33-50、沖縄考古学会
- 山野ケン陽次郎 2013「ナガラ原東貝塚出土貝符の編年的位置づけ」『ナガラ原東貝塚の研究 5世紀から7世紀前半の沖縄諸島』pp.278-294、熊本大学文学部
- 山野ケン陽次郎 2016「兼久式土器に共伴する貝製品の年代と変遷」『第8回奄美考古学会発表資料』奄美考古学会
- 山野ケン陽次郎 2019「先史琉球列島における広田上層式貝符の研究」『中山清美と奄美学－中山清美氏追悼論集－』、pp.169-184、奄美考古学会
- 矢持久民枝 2003「広田遺跡出土貝符の検討－その分類と編年－」『種子島 広田遺跡（本文編）』、pp.311-328、広田遺跡学術調査研究会・鹿児島県立歴史資料センター黎明館
- 興嶺友紀也 2019「貝塚時代後2期における広域土器編年の設定」『中山清美と奄美学－中山清美氏追悼論集－』

図出典

**図3** 1（中川原貝塚：仲宗根ほか2001）、2・3（具志原貝塚：沖縄県教育委員会1985、具志堅原図）、4・20（北原貝塚：沖縄県教育委員会1992）、5（馬毛島椎ノ木遺跡：熊本大学文学部考古学研究室1980）、6（広田遺跡：南種子町教育委員会2007）、7・17（火之上山遺跡：鹿児島県立埋蔵文化財センター1996）、8・9（スセン當貝塚：新里貴之2000a）、10・11・22（前原貝塚：宜野座村教育委員会2005）、12・21（平敷屋トウバル遺跡：沖縄県教育委員会1996、12は第19図12・具志堅原図）、13・14（嶽ノ中野B遺跡：西之表市教育委員会1995）、15（西之表市国上：旭1975）、16（上能野貝塚：旭1975）、18・19（マツノト遺跡：笠利町教育委員会2006）、23：（具志原貝塚：沖縄県教育委員会1997）、24（勝連城跡：うるま市教育委員会2011）

**図6・7** 1・2・24（大堂原貝塚：名護市教育委員会2005）、3・4・18～20・25～27・34・35（フワガネク遺跡：名瀬市教育委員会2003、35は奄美市教育委員会2007）、5・6・10（清水貝塚：具志川村教育委員会1989、6は報告書未掲載資料、具志堅原図）、7・11（新原貝塚：南城市教育委員会2011）、8・9（北原貝塚：沖縄県教育委員会1992）、12（平敷屋トウバル遺跡：沖縄県教育委員会1996、第29図21・具志堅原図）、13（勝連城跡：うるま市教育委員会2011）、14・15：（マツノト遺跡：笠利町教育委員会2006、15は木下尚子2019）、16・17（熱田貝塚：沖縄県教育委員会1979）、21～23：（前原貝塚：宜野座村教育委員会2005）、28～30（具志川島遺跡群：伊是名村教育委員会1977）、31・32（久志貝塚：名護市教育委員会1980）、33（用見崎遺跡：熊本大学文学部考古学研究室1995）、36（米須貝塚：糸満市教育委員会1985）、37（伊礼原D遺跡：北谷町教育委員会2017）、38（喜如嘉貝塚：沖縄県教育委員会1994）、39（具志川グスク：うるま市教育委員会2006）

**図8** 1・2（米須貝塚：糸満市教育委員会1985）